

## 発音学習動機・ストラテジーと発音評価

Motives, Strategies of Learning Japanese Pronunciation and Pronunciation Evaluation

神山由紀子

KAMIYAMA Yukiko

早稲田大学日本語教育研究科修士課程：〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-1

Graduate School of Japanese Applied Linguistics, Waseda University : kamiyamayu@aol.com

**Abstract** : This paper looks into the relation between the motives, strategies of pronunciation learning and the pronunciation evaluation. From the answers to the questionnaire, I obtained the data of learners' strength of motives and the use of strategies. Learners' pronunciations were obtained by carrying out the pronunciation task. Then native Japanese speakers evaluated them based on "naturalness". From the result of the evaluation, learners were divided into upper group and lower group. The outcome showed that "self consciousness in pronunciation" "paying attention to the movements of lips and tongue" and "consciousness of others' opinions" were related to high evaluation.

キーワード：発音学習動機とストラテジー・評価上位群と下位群・発音体裁感と口意識型ストラテジー

### はじめに

日本語学習者の中には、自然で聞きやすい発音を身に付ける者もいれば、母語の影響が明らかな発音の者もいる。発音学習に対する動機やストラテジーが発音の向上と関係するのか。どのような動機とストラテジーが、発音を向上させるのか。本調査ではアンケート調査、発音能力調査を行い、検討した。

### 調査1：アンケート調査

小河原(1997)の「発音学習動機に関する質問24項目(以下、M項目)<sup>1)</sup>と「発音学習ストラテジーに関する質問33項目(以下、S項目)<sup>2)</sup>をアンケート調査に用いた。

各質問に対する5段階回答に、1~5のポイント割り当て、数値化し動機の強さとストラテジー活用の尺度とした。

### 調査2：発音能力調査

助川(1993)を参考にし、発音の問題点が現れやすいと考えられる単語24・文8・文章1を選択し発音タスクを作成し、調査協力者に発音してもらった。協力者は初級後半レベルの学習者17名であった。発音評価は日本人母語話者9名に依頼し、「日本語として自然である」を基準とし、5段階で評価してもらった。語・文・文章のいずれに

おいても高い評価得た上位群(4名)と低い評価を受けた下位群(4名)を取り上げて、その動機とストラテジーの傾向を検討した。

### 結果：アンケート調査と発音能力の結果

アンケート調査からM項目とS項目のポイント平均を上位群と下位群別に割り出した<sup>3)</sup>。

図1から上位群と下位群の「動機」の傾向を見ると、<発音体裁感>、<道具的動機>の2点において相違が見られた。<発音体裁感>は「日本人との会話において通じなかったり、発音を笑われたりすることに敏感である」とする項目であり、学習者が自分の発音が日本人にどのように受け止められるかに敏感であることがプラスに働き、上位群の学習者の発音への意識を高めていると考えられる。<道具的動機>は「日本語能力を将来のための手段とする意識」を表しているが、実際の自然な発音習得には結びつかないと言える。

図2から「ストラテジー」の傾向を見ると、<口意識型S>と<他者意識型S>に相違が見られた。前者は「教師の口の動きを意識したり、自分の舌や唇の位置を考えたりする」という項目であり、本調査の協力者は、韻律よりも単音の発音における自然さが見られ<sup>4)</sup>、このストラテジーが単音の発音に効果的であると考えられる。後者は「他

者からの自分の発音への評価を意識した学習」を表すが、M 項目中の<発音体裁感>が、戦略として<他者意識型 S>として表れていると考えられる。

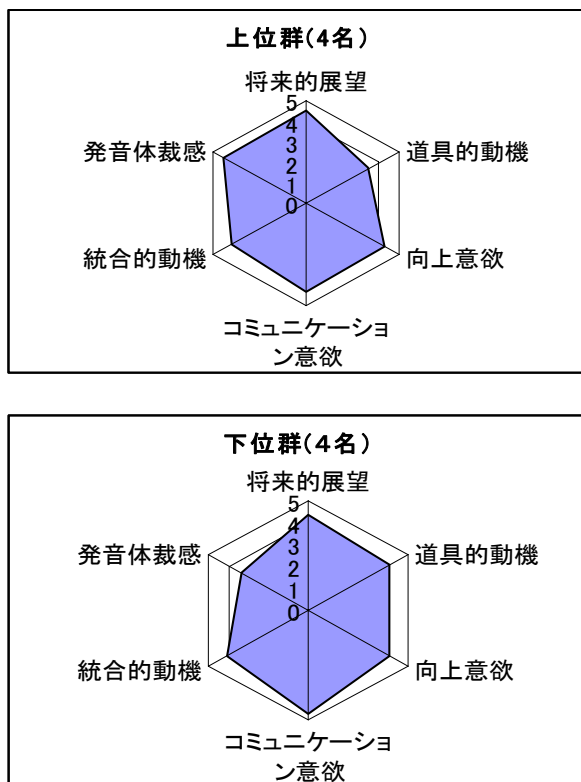


図 1 発音学習動機

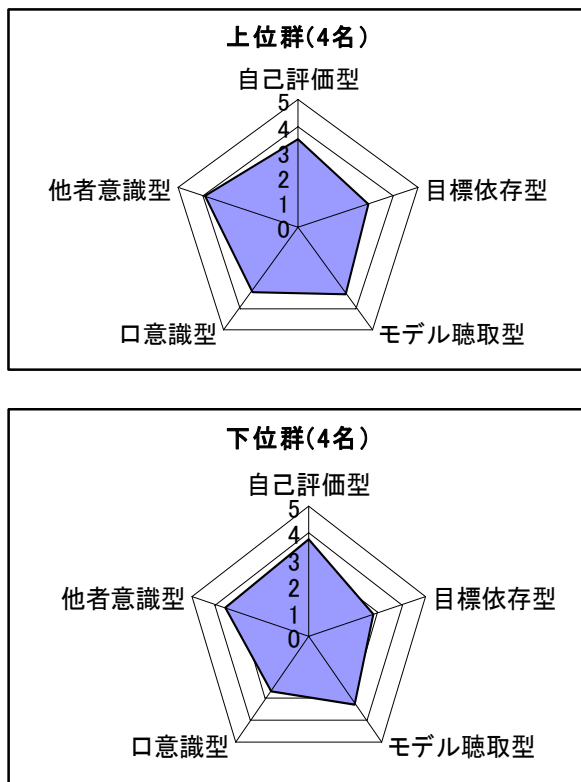


図 2 発音学習ストラテジー

### まとめと発音教育への適用

本調査の結果、上位群の学習者は<発音体裁感><他者意識型 S>をプラスに活用し、<口意識型 S>により、発音の生成を試み、より自然な発音に近づける努力をしていることが明らかになった。

指導面では自然な聞きやすい発音の重要性に対する学習者の意識を高め、自己の発音に注意を向ける戦略の活用を促すことができる。

注

- 1 下位分類は①<発音に対する将来的展望>、②<道具的動機>、③<発音向上意欲>、④<コミュニケーション意欲>、⑤<統合的動機>、⑥<発音体裁感>である。
- 2 下位分類は①<自己評価型ストラテジー (以下 S)>、②<目標依存型 S>、③<モデル聴取型 S>、④<口意識型 S>、⑤<他者意識型 S>である。
- 3 M 項目ポイント

動機	上位群	下位群
発音に対する将来的展望	4.5625	4.375
道具的動機	3.375	4.125
発音向上意欲	4.25	4.05
コミュニケーション意欲	4.35	4.7
統合的動機	3.9375	4.125
発音体裁感	4.375	3.375

S 項目ポイント

ストラテジー	上位群	下位群
自己評価型 S	3.4725	3.7225
目標依存型 S	2.94	2.7825
モデル聴取型 S	3.215	3.25
口意識型 S	3.15	2.65
他者意識型 S	3.8125	3.5625

- 4 語の評価が文・文章の評価より高い者が 17 名中 13 名いた。

参考文献

小河原義朗 (1997) 「外国人日本語学習者の発音における自己評価」『教育心理学研究』第 45 巻 第 4 号 pp72-82

助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向—アンケート調査の結果から—」『日本語音声と日本語教育』pp187-222